

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月15日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520665

研究課題名（和文） 日本近世における社会的結合にみる遊芸文化と地域社会

研究課題名（英文） The formation of the Yugei culture and community which see to the social bond of Japanese early modern society

研究代表者

神田 由築 (KANDA YUTSUKI)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：60320925

研究成果の概要（和文）：全国に共通する芸能文化を普及させた近世社会は、世界史的観点から見ても特異である。それが可能となったのは、浄瑠璃などの遊芸文化が広範に享受され、共通の文化的意識が醸成されたからである。本研究では、大坂の浄瑠璃渡世集団や「素人」浄瑠璃、役者村の芸能者など、さまざまな社会的結合に媒介されて、近世芸能が享受される構図を浮かび上がらせた。

研究成果の概要（英文）：Even if the early modern society which spread the entertainments culture common to the whole country sees from a world-historic viewpoint, it is unique. It became possible because the Yugei culture was enjoyed extensively and common cultural consciousness was brewed. Various social bonds, such as an entertainments person of Osaka's Joruri play trade group and "amateur" Joruri play, and a player village, act as intermediary, and the composition that modern entertainments are enjoyed was made to emerge in this research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：近世史

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、『近世芸能興行と地域社会』（東京大学出版会、1999年）において、近世における芸能興行の実態と、それを通して見た地域文化の構造について考察した後、巨大都市大坂を頂点とする西日本の芸能の「流通」構造の実像を明らかにすることにとめてきた。その間、巨大都市江戸における

文化構造について、吉田伸之『身分的周縁と社会＝文化構造』（部落問題研究所、2003年）が出され、巨大都市の内部に抱え込まれた文化の深みについて、精緻な構図が描けるようになったと同時に、文化を社会全体の営みの反映ととらえる社会＝文化構造という視点が獲得された。

しかし、近世文化の存立環境としての社会の全体像を提示するには、なお以下の課題が残った。

(1) 「興行」の局面からのみではなく、「遊芸」の要素に着目する必要がある点。

(2) 都市社会ばかりでなく、村落を含めた地域社会を考慮に入れる必要がある点。

そのなかで、研究開始の前に、服部幸雄によって、素人の百姓による芝居とプロの役者の芝居とを総合的に捉えようとする論考が発表され（『歌舞伎の原郷』吉川弘文館、2007年）、よりいっそう意識的に都市と地域社会との関係を視野に入れた、包括的な研究の必要性が痛感された。

2. 研究の目的

本研究では、前掲の課題にもとづき、具体的に二つの目的を掲げている。

(1) 「興行」と対比させて「遊芸」文化の特徴を描くこと。

本研究では研究素材として、遊芸文化の代表である浄瑠璃（本研究では義太夫節のことを指す）など音曲を取り上げる。

(2) 都市文化の影響を考慮に入れて、地域文化の具体像について描き出すこと。

3. 研究の方法

本研究では具体的に、①「遊芸」文化を特徴づける「社会的結合」に関する史料収集および考察を深めること、②都市文化の影響を考慮に入れて地域での芸能文化について明らかにすること、の二つの方向で作業を進めた。

まず①について、大坂における「素人」浄瑠璃の史料を収集して、そのうえで大坂における遊芸文化の受容について、ひとつの見解を示すことにした。また大坂と並んで素人による浄瑠璃文化の享受が盛んに行われた徳島においても調査した。②については、当初

はおもに香川県小豆島、および長野県飯田をフィールドとする予定であった。しかし、研究を遂行する過程で史料的な制約もあり、また豊後の芸能者集団との関わりから兵庫県や九州各地がフィールドとして注目されるようになった。よって若干の方針変更を行い、芸能者集団の結合のありかたや、文化の伝播のかたちを追求するために、同地での調査・考察を進めた。

4. 研究成果

(1) 浄瑠璃文化と社会的結合

近世の遊芸文化の代表である浄瑠璃の特徴は、都市のあらゆる芸能興行の場で上演された芸能であること、その意味で興行の根幹を担う芸能であったことと、その一方で、興行とは別のところで遊芸的な発展をとげた点である。浄瑠璃が民衆のあいだに深く浸透したのには、いくつかの要因がある。

一つめが、専門の芸能者の存在である。専門の芸能者とひとくちに言っても、近世期において義太夫節を渡世とする芸能者には、さまざまな集団があった。その代表的なものが、「因講（ちなみこう）」なる同業者集団（＝社会的結合）である。彼らは、おもに江戸・大坂などの大都市で集団化をとげ発展しつつ、ある時は互いに競合しながら先端的な浄瑠璃文化を担い続けた。その他に三井寺蟬丸宮配下の説教者によって組織された説教讚語座がある。説教者たちは、歌舞伎芝居や人形操芝居などを渡世とし、18世紀末から19世紀にかけて類似の芸能者たちとの対抗関係を深め、特に大坂の寺社境内における興行をめぐる、因講の芸能者と激しく対立した。

二つめに、大都市の芸能者が地方にも巡業し、浄瑠璃文化を広めたことである。因講に所属する太夫・三味線弾きが地方で興行する

ことで、地方で浄瑠璃を習う者が現れるなど、遊芸文化の普及にも影響があった。やがて長野県飯田のように、地方にも独自の芸能者集団が成長して、地方における浄瑠璃文化の定着に貢献した。

三つめに、専門の芸能者と一般民衆とのあいだに、浄瑠璃を熱狂的に愛好する、史料用語でいう「素人」という独特の階層が形成されたことである。彼らは、たんに聴衆として浄瑠璃を楽しむだけでなく、芸名をもち舞台上で研鑽を積むような、ある特定の存在であった。素人の動向は、浄瑠璃文化の特質を知ろうえでとても重要である。特に大坂の素人らは、都市内地域ごとに結合し、寺社境内の寄席を拠点としながら「さらい会」を開くなど、旺盛な芸能活動を展開した。彼らの存在が、巨大都市大坂の遊芸文化の母胎となったのである。

四つめに、浄瑠璃に関するおびただしい出版物が刊行されたことも、浄瑠璃文化の全国的な拡がりに追い打ちをかけた。浄瑠璃に触れてみたいと思う人々にとって、稽古本や手引き書は良き道案内となった。19世紀には素人をランク付けした浄瑠璃番付も何枚も発行された。これらは、ちまたでの浄瑠璃の評判を高めたことであろう。

『江戸の浄瑠璃文化』（山川出版社、2009年）では、こうした浄瑠璃をとりまく文化的状況の総体を浄瑠璃文化と呼び、民衆が深く愛したこの芸能を通して近世後期の文化の諸相を紹介した。

その次に、浄瑠璃に対して積極的な関わりを求める近世大坂の「素人」が、どのような実態をもち、社会結合として存立していたのか、さらに分析を進めた結果、以下のことが判明した（「大坂の芸能と都市民衆」塚田孝編『身分的周縁の比較史』清文堂出版、2010年）。素人は18世紀後半頃から急速に

成長する。素人の活動そのものは稽古文化の域を出るものではなかったが、ときには全段の一部だけを上演する「見取り」上演の流行と連動して興行の形態にも影響を与えるなど、総じて浄瑠璃文化の再生産の原動力となっていた。それは、とりわけ浄瑠璃が大坂という都市を基盤に発達したことと無関係ではない。こうした都市民衆のあり方を「社会的結合」の観点からとらえるならば、「社中」「組」なる結合形態が注目される。その実態はまだ不明な点が多いが、もともとは、たとえば近くの「稽古場」でともに研鑽を積むなど、ある程度は地域的な結合をもっていたと考えられる。それぞれの「組」は、素人の結合組織という点では共通性をもちながらも、たとえば「川竹」組は芝居と深い関わりをもち、「ざこば」組は魚市場に基盤を置くなど、地域の性格によって「組」のありようもそれぞれにちがっていた。やがて、大坂の市域の拡大や都市社会の成熟とともに、「組」の結合単位が細分化されたり、ゆるやかな地域分布をもつ「組」が登場するようになる。そこからは、素人浄瑠璃の展開が都市大坂の変遷と密接な関係をもっていたことがうかがえる。

（2）興行の近代化

このように19世紀には、遊芸文化が都市社会の成熟と結びついて広範に展開をとげるが、その一方で道頓堀の芝居小屋などでは、近代化の波のなか、興行体制の転換期を迎えていた。むしろ「興行」の方が「遊芸」よりも、近代化の影響を考えるうえでは重要である。よって、いまいちど「興行」について本格的に研究する観点から、近代への移行過程について考察した（「明治期の道頓堀劇場の経営」『大阪商業大学商業史博物館紀要』12号、2011年）。近世の芝居座経営と明治期の劇場経営とでは簡単に比較できない

い点もあるが、相違点をふまえたうえで両者を対照することで、「興行」とは何かについて改めて問うことができる考えたのである。明治期の中座の経営帳簿を分析した結果、近世では頭取のもとで把握されていた「日用」的存在の給金が、勘定場に直接管理されるようになったことなどの変化がありつつも、明治30年代に松竹が進出する以前は、近世からの慣行が多少なりとも継続していたことが明らかになった。明治39年に松竹の白井松次郎が中座に進出し、興行時間の短縮という思い切った改革を断行する。芝居の興行体制が変われば、芝居町の様相も変わる。興行時間の短縮によって、幕間の食事や着替えといった芝居見物のスタイルと密接に結び付いていた芝居茶屋の売上げは落ち、やがて芝居茶屋が減少して飲食店が増えるようになる。こうした近代への変遷を追うことで、近世の「興行」が、芝居座の経営のみならず、関連業者の立ち並ぶ社会空間と一体のものであったこと、またその本格的な解体が、少なくとも大阪の場合は、明治末期の松竹進出に始まることが見えてきた。

(3) 都市と地域の文化

本研究では、当初は都市文化の影響を考慮に入れて、村落での芸能文化について明らかにすることを目指したが、史料的な制約などもあって、必ずしも「村落」ではなく地方城下町も含めた「地域」という概念に軌道修正し、文化における都市と地域の関係を問うことにした。

ある地域がどのように歌舞伎や浄瑠璃文化を受容したのか。その具体例について、豊後国杵築の祭礼における段尻について分析した（「豊後国杵築城下の段尻芸に関する史料について」『論集きんせい』31、2009年）。近世の祭礼芝居では、専門の役者集

団による、いわゆる“買い芝居”が行われるところもあり、杵築藩内でも10月の若宮八幡宮の祭礼芝居は専門の芸能者を雇っていた。それに対して、6月の飛松天満宮の段尻芸では、年によって専門の芸能者が勤めたり、あるいは素人の町人が勤めたり、しかも歌舞伎であったり人形浄瑠璃であったり、いくつかの類型が見られ、上演回数における割合は少ないながらも、「地芸」が行われるのが大きな特徴であった。また、専門の芸能者としては、近隣の馬場尾村の役者と特別な関係をもっていた。馬場尾村は、いわゆる「役者村」と呼ばれる、役者が集住する村落である。

しかし、時代の変遷のなかで、段尻芸の担い手も変化するようになる。「地芸」はほとんど行われなくなり、専門の芸能者が、しかも馬場尾村以外の芸能者が増えていく。そして、大正期には費用が安いからとの理由で、馬場尾役者との契約が長州のチンコ芝居に変更されて、請元を媒介とする“買い芝居”の様相が濃くなっていく。これは、馬場尾村の芸能者集団にとっても、祭礼芝居との関係の変化と見ることができる。杵築の段尻芸は、馬場尾村のみの場ではなくなり、中津や算所、長州の芸能者にとっても、格好の稼ぎ場所となったのである。

むしろ近世よりも近代になって役者村を母胎とする専門の芸能者集団の活躍が盛んになっていくことは、こうした地域社会との関係の変化が背後にあるのかもしれない。祭礼芝居の変化の先には、近代の九州の芝居の世界も見えてくる。

一方、17世紀から18世紀に役者村の生成過程も、やや明らかになった（「近世芸能につどう人びと」『能と狂言』7、2009年）。かつて北九州・中国地方西部の役者村は、その起源が八幡宮に勤仕した雑芸能民に求める系統（八幡宮勤仕系統）と、空也上人

を始祖とする九品念仏の系譜を伝える系統（九品念仏系統）の大きく二つに分かれることを確認したが、但馬国城崎郡堀村の芸能者について分析した結果、中国地方東部まで視野に入れると、八幡宮勤仕系統を含むより大きな流れとして、陰陽師や万歳との由緒を説く、いわば「陰陽師—万歳系統」が想定できるのではないかと考えるに至った。堀村の万歳師は、近世初期からの領内勸進が活動の基盤にあった。一方、歌舞伎役者としては、播磨から但馬・丹波一円に興行範囲を拡げる必要があった。万歳と歌舞伎が「並行」する姿は、本来的には、近世芸能者集団における勸進行為と興行との共存が表出したものとみられる。

それが、19世紀になると、歌舞伎興行を成立させるために、陰陽師や万歳師の活動を担保した勸進の局面が二つの意味で利用されることになる。一つは、天保改革による興行統制を乗り切るための論理として、もう一つは、対外的に広く活動の場を求める際の看板としてである。「万歳師」という歌舞伎役者のありようは、こうした、どれほど広範な巡業を展開しようとも「芸能市場」の原理のみで生きることができず、勸進行為の系譜を断ち切れない、まさに「近世」的な芸能者集団としての宿命を示している。

（4）歴史的な史料としての芸能作品

研究の過程で新たな課題として浮かび上がったのが、芸能作品を通じて近世の人々がどのような感覚を抱いたのか、という点である。人々の身分や格式に対する認知を明らかにするには、それに相応しい史料が必要である。近世の歴史的主体は、しばしば歌舞伎や浄瑠璃といった芸能作品に溶かし込まれ、観客に享受されてきた。歌舞伎にしる浄瑠璃にしる、芸能作品は新たな史料的可能性を秘め

た宝庫である。作品の設定は虚構にすぎなくとも、作品を享受した人々の感覚には、それなりの実体があったはずである。それこそが、「興行」と「遊芸」、「都市」と「地域」をつなぐ核心である。そこで本研究では、芸能作品に近世の人々の感覚を探るという試みを行った。

まず浄瑠璃「双蝶蝶曲輪日記」を題材に、「武士」としての表象をもちながら武士身分ではない郷代官という存在のうえに、作者がいかなる葛藤を、いかに描こうとしたのか、その意図を見通そうと試みた（「近世の身分感覚と芸能作品」『お茶の水史学』53、2010年）。

また、近松門左衛門の作品をはじめ、浄瑠璃作品における言葉の特徴を探った結果、18世紀なかば頃から変化が現れることがわかった（「浄瑠璃にみる対面意識の変遷」『文学』12、2011年）。近松門左衛門の作品が、「一分」という言葉で18世紀前半の町人社会に内在する対面意識を描いたのに対して、やがて「夏祭浪花鑑」などに顕著なように、「顔」という言葉に象徴される、侠客たちのストレートな義侠心が芝居の主題として躍り上がってきたのである。身分制社会の内実が変化してゆくなか、身分意識や道徳的規範にもとづく「一分」よりも、外見的表象である「顔」に人々の関心が移っていったと考えられる。

全国に共通する芸能文化を普及させた近世社会は、世界史的観点から見ても特異である。それが可能となったのは、浄瑠璃などの遊芸文化が広範に享受され、共通の文化的意識が醸成されたからである。本研究では、さまざまな社会的結合に媒介されて近世芸能が享受される構図を通して、当時の人々の社会観や道徳観が全国的に共有される様相を浮かび上がらせるとともに、そうした人々の

内面にも少しは迫ることができたのではないかと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① 神田由築、近世芸能につどう人びと、能と狂言、査読無、7号、2009、3-13
- ② 神田由築、豊後国杵築城下の段尻芸に関する史料について、論集きんせい、査読有、31号、2009、19-63
- ③ 神田由築、府内藩浜之市に集う人々、史料館研究紀要(大分県立先哲史料館)、査読無、14号、2009、1-10
- ④ 神田由築、近世・近代移行期における甲府の遊所、年報都市史研究、査読有、17号、2010、10-23
- ⑤ 神田由築、近世の身分感覚と芸能作品、お茶の水史学、査読有、53号、2010、123-137
- ⑥ 神田由築、浄瑠璃にみる対面意識の変遷、文学、査読無、12巻、2011、41-47
- ⑦ 神田由築、「役者評判記」にみる旅芝居、西鶴と浮世草子研究、査読無、5号、2011、152-164
- ⑧ 神田由築、明治期の道頓堀劇場の経営、大阪商業大学商業史博物館紀要、査読無、12号、2011、21-49

[図書] (計2件)

- ① 神田由築、山川出版社、江戸の浄瑠璃文化、2009、102
- ② 神田由築、他、清文堂出版、身分的周縁の比較史、2010、462

6. 研究組織

(1) 研究代表者

神田 由築 (KANDA YUTSUKI)

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：60320925

(2) 研究分担者
無し

(3) 連携研究者
無し